

いま何をしているのか？

竹内 聖一

はじめに

壁を黄色に塗っているとき、私は自分が何色のペンキを塗っているのか、観察によらずに知ることが出来るだろうか？さらに言えば、色はおろか、自分が塗っているものが、ペンキなのか、糊なのか、あるいは、自分が手にしているものが刷毛なのか、それとも卓球のラケットなのかさえ観察によらずに知ることが困難ではないだろうか。

ところが、アンスコムはその著書『インテンション』において、行為者は自分のしていることを知るのに観察に頼る必要はないと主張している。本稿では、行為において観察の果たす役割について明らかにすることを通じて、アンスコムの主張はその見かけほど奇妙なものではないことを示したい。

1 アンスコムの議論

アンスコムは著書『インテンション』において、意図的行為は、観察によらずに知られるものに属すると述べている(Anscombe, § 8, p. 14)¹。そして、自分のしていることについて観察によらずに得られる知識は「実践的知識」と呼ばれる(Anscombe, § 32, p. 57)。

さらに、『インテンション』の終盤において、アンスコムは自分のしていることについて、実践的知識だけでなく、観察による知識を得ることも可能であると論じている(Anscombe, § 48, pp. 88-89)。そして、行為について観察によらずに得られる知識は、理論的知識(speculative knowledge)と呼ばれる。こうして、行為については二種類の知識を得ることができるとされる。アンスコムによれば、実践的知識と理論的知識という二種類の知識の主な違いは、前者は観察によらない知識だが、後者はそうではないということである。

ただし、理論的知識を認めることによって、アンスコムは自分のしていることの中には、観察しなければ知り得ないこともある、と譲歩しているわけではない。なぜならアンスコムは、この箇所において、実践的知識は理論的知識によって補われる必要があると論じてはいないからである。アンスコムは、行為者が自分の行為について持つ実践的知識は完全なものであると論じた上で、さらに、実践的知識とは別に理論的知識を持つことも出来る、と主張しているにすぎないのである。

しかし、冒頭にも述べたように、自分が何をしているのかを観察によらずに知りうるという主張は、にわかには受け入れがたい。また、『インテンション』におけるアンスコムの議論が、一体どのようにしてこうした受け入れがたさを払拭しようとしているのかは、一見しただけでは、よく分からないというのが正直なところである。まずはアンスコム自身の議論の一端をみてみることにしよう。

『インテンション』の第28節には、「我々は壁を黄色に塗ろうと意図してそれを実行することがあるが、自分が壁を黄色に塗っていることを『観察に基づかないで知っている』と言えるだろうか」という仮想の論敵からの疑問が記されている(Anscombe, § 28, p.50)。ここから、アンスコムも「自分が何をしているのかは、観察によらずに知りうる」という自らの主張が普通には受け入れがたいものであることを認識していたことがうかがえる。

以下は論敵からのこうした問いかけに対するアンスコムの回答と思われる箇所の引用である。

私が目を閉じて何かを書く場合…[中略]…実際問題として、目を閉じてしまってその助けを借りないとしたら、私の書く文字は読みづらいだろう。しかし、我々がなしていることを知ることに関して、観察による知識の果たす役割は、ちゃんとした文字を書くために目が果たす役割と同じことなのではあるまいか。つまり、自分の意図的行為の対象についての知識や意見を我々が持つとすれば、観察とは、目が文字を書く際の補助手段であると同様、単なる補助手段なのである。(Anscombe, § 29, p. 53)

上の引用箇所からも分かるように、アンスコムは、行為を「ちゃんと」や

るためには観察がその補助手段となることは認めている。この主張を認めれば、自分が「ちゃんと」行為しているかどうかを知るためには観察が必要であるということも認めることになるのではないだろうか。それゆえ、自分が実際に何をしているかを知るには、観察が必要であるという立場を採用せざるを得なくなるように思われる。それにもかかわらず、アンスコムは自分のしていることについて知るためには観察が必要であるという立場はとらないのである。

2 二要素説

前の節で述べたように、アンスコムの主張は容易に解決できない難点を含んでいるように見える。たしかに、黒板に字を書くという事例では、目を閉じてでも自分が何を書いているのか知っているというアンスコムの主張には一定のもっともらしさがある。「あなたは今何を書いているのか」と問われて、自分の書いている(はずの)文字列が何であるかを答えることが出来れば、行為者は自分の意図的行為について知っていると言ってよいかもしれない。しかし、この事例を離れて、他の行為についても考えてみれば、このもっともらしさは消え失せてしまうのではないか。

たとえば、野矢は次のように論じている。

「意図的行為とは観察に基づかないで知られる出来事の一種に他ならない」という、行為論においてはもはや教科書的ともなったアンスコムの主張はいささかミスリーディングである。この主張そのものは、単純に誤りだろう。興味深い事例として、鏡を見ながらひげを剃るような行為を考えてみてもよい。鏡に映った姿を観察せずには、ひげを剃ることは難しい…[中略]…それゆえアンスコムは、観察に基づかずに知られるのは、意図的行為ではなく、意図であると言わねばならなかった。実際、彼女が言いたかったことは、「私がどういつもりでそうしたのかを、私は観察に基づかないで知る」ということであつたと思われる。

(野矢, pp. 248-9)

また、アンスコム自身も言及している、壁に黄色いペンキを塗るという事

例についても同様なことが言える。アンスコム的主張を検証するために、次のような実験をすることにしよう。行為者に壁を黄色に塗ってほしいと伝え、黄色いペンキを含む道具一式を確認してもらおう。作業が始まって一定時間経ったところで、行為者に目隠しをさせ、気づかないうちにペンキを別の色に取り替えてしまうのである。「あなたは今何をしているのか」という問いに対し、この行為者は「壁に黄色いペンキを塗っているのだ」と答えることだろう。しかし、ペンキのすり替えの結果、実際に壁に塗られているのは赤色のペンキだったとすれば、行為者は自分のしていることについて観察によらずに知っているというアンスコム的主張はとても正しいとは言えないことになるのではないか。

以上のような事例から見えてくるのは「意図について知るのに観察は必要ないが、意図的行為について知るには観察が必要である」という立場である。実際、このような立場をとれば、黒板に字を書くという事例にせよ、ペンキ塗りの事例にせよ、うまく説明がつかせよう。行為者が観察によらずに答えることが出来るのは、あくまで、ある行為をしているときの自らの意図なのである。

こうした見方に従うならば、「あなたはいま何をしているのか」という問いに対する、「私はいましかじかのことをしている」という答は、自分がいましていることを端的に述べるものではなく、自分がどのような意図をもっていまそうしているのかを述べるものであると考えられる。つまり、「私はいましかじかのことをしている」という表現は「私はしかじかのことをしようという意図でいまこうしている」という表現の省略形であるということになるのである。

3 ファルヴィーの議論

ファルヴィーは、上に述べた立場、すなわち、「意図について知るのに観察は必要ないが、意図的行為について知るには観察が必要である」という立場を、二要素説(two-factor thesis)と名付け²、二要素説に対して反論を試みている(Falvey, p. 21)。

意図的行為についての観察によらない知識の可能性を示すファルヴィーの議論において、最も興味深いのは以下のような議論である。ファルヴィーは、「あなたは何をしているのか」という問いに対する行為者の答に登場する、進

行形(「私はいま～している」)に注目する。ファルヴィーによれば、進行形には、行為者が心変わりしたり、あるいは阻止されたりして、達成されることのない行為についても適用可能であるという性質がある(Falvey, p. 22)。たとえば、ある人が道路を横断している途中で誰かに連れ去られたり、あるいは忘れ物に気がついて引き返すなどして結局は道路を横断しきらないとしても、その人について「道路を横断している(いた)」と記述するのは間違いではない³。

私のみるところ、進行形による記述が、達成されない行為に対しても適用可能なのは、そもそも進行形が行為の達成を含意していないからではないかと思われる。これにより、行為者は自分の行為が成功するか否かを観察することなしに、というよりはむしろ、そうした観察に先立って、進行形による記述を行為に適用することが出来るのではないだろうか。もちろん、観察によって行為が結局達成されなかったことが判明することもあり得るだろう。しかし、たとえ行為が達成されないとしても、進行形による記述を行為の記述とすることは間違いではないというわけである。

まず、進行形が行為の成功を含意していないことを確認するために、かつてギルバート・ライルが行ったある議論をとりあげてみたい。ライルは『心の概念』において、達成動詞(achievement verb)と仕事動詞(task verb)という区別を示している(Ryle, p.150)。ライルによれば、二種類の動詞の間には大きな違いがある。それは、達成動詞を適用する際、我々は、ある作業の遂行に加えて何らかの事態が成立していると主張している、という点にある。ライルの挙げている事例をそのまま挙げよう。たとえば、「勝つ」という動詞は達成動詞である。なぜなら、走者が勝つためには、走者が走るということだけではなく、競争相手がその走者の後にテープを切ることが必要とされるからである。

つまり、達成動詞の持つ意味には何らかの事態の成立が含まれているのに対し、仕事動詞の持つ意味はそうではないのである。それゆえ、ライルによれば、「ある人はその標的をねらったが失敗した」、または「ある人はねらい、そして成功した」と有意味に(significantly)述べることは出来るが、それに対して、「ある人はその標的に当てたが失敗した」と述べたり、「ある人はその標的に当て、そして成功した」と述べたりすることは有意味ではあり得ない(Ryle, p. 151)。蛇足を承知で付け加えるならば、これは「ねらう」(仕事動詞)の意味に

は含まれていない、ある事態の成立(標的に当たること)が、打ち抜く(達成動詞)には含まれているからだと思われる。それゆえ、達成動詞とともに、当の達成動詞の意味に含まれるある事態の不成立を示す語を一緒に用いれば、矛盾したことを語ることになるし、達成動詞とともに、当の達成動詞の意味に含まれているある事態の成立を示す語を一緒に用いれば、言わずもがなのことを語っているという印象を与えることになるのである。

有意味であるかどうかはさておき、仕事動詞を成功や失敗を表す語とともに用いても奇異な印象を与えないのに対し、達成動詞が成功や失敗を表す語とともに用いられると奇異な印象を与えるというのは確かである。ファルヴィーが目目している進行形もまた、成功や失敗を表す語とともに用いても奇異な印象を受けないのではないだろうか。そして進行形の興味深い点は、ひとたび進行形にしてしまえば、「ある作業の遂行に加えて、ある事態の成立を主張する」という達成動詞の性質も失われてしまうことである⁴。

たとえば、「私は黒板に文字を書いたが、書けなかった」はどこか奇妙だが、「私は黒板に文字を書いていたが、書けなかった」についてはそうではない。また、「私は壁を黄色に塗ったが、塗れなかった」と「私は壁を黄色に塗っていたが、塗れなかった」についても同様である。つまり、進行形に直された達成動詞は見かけの上では仕事動詞と同様の振る舞いを示すようになると言える。したがって、「いま何をしているのか」という問いに対して「私はいま～している」と進行形を使って答えるとき、我々は、あらゆる行為についてその行為が達成されるか否かを度外視して、「自分がいましていること」について答えていると考えられるのである。

進行形の、こうした性質を踏まえてファルヴィーは以下のような議論を展開する(Falvey, p.23)。

まず、ファルヴィーは、「あなたはいま何をしているのか」という問いに対して与えられる「私はいま～している」という答えは、行為者の意図の表現(expression of intention)であると論じる。この点は、二要素説の主張と同じである。しかし、さらにファルヴィーは、「私はいま～している」という答えは行為者の意図の表現であると同時に、行為者のしていることの記述(description of

what he is doing)でもあると主張するのである。

また、ファルヴィーは行為者の意図の表現が無条件に、行為者のしていることの記述となると主張しているわけではない。ごく当然のことではあるが、「私はいま～している」という発話が行為の正しい記述となるのは、「私はいま～している」という発話がなされた時点において、行為者が実際に～しているとき、またそのときに限られるのである。ただし、以上の議論を踏まえるならば、進行形になっている動詞が達成動詞の場合、「発話の時点において行為者が実際に～していること」という条件が実質的に意味するのは、『～している』という記述を適用可能にするような、ある事態の成立をもたらず何らかの作業を発話の時点において実際にしていること」というものになるだろう。

4 二つの議論の検討

ファルヴィーの議論は結局のところ、二要素説とさして変わらないものなのではないだろうか。たしかに、一見したところ両者にそれほど大きな違いはないように見える。しかし、二要素説の支持者が、意図的行為についての観察によらない知識を断念せざるを得ないのに対して、ファルヴィーの立場からは、発話の時点において、行為者が実際にその行為をしていることという条件付きではあるものの、意図的行為について観察によらない知識を認めうる。そして、それが可能なのは、進行形による記述が、行為が達成されるか否かを度外視して行為に適用可能だからではないかと私は論じた。

しかし、行為が達成されるか否かという、まさにその点こそが問題なのだと、二要素説の支持者は言うだろう。この点は達成動詞によって記述される行為の場合に特に問題となる。行為者のしている作業が実際にある事態の成立をもたらし、結果として行為者が実際にその行為の達成に成功した状況においてならば、行為者は、「いま～している」と発話した時点においても、自らの意図的行為について観察によらない知識を有していたと言ってもよいかもしれない。しかしある事態の成立を脅かす何らかの問題が生じた場合、それを確かめるために、やはり観察が必要ではないか、と論じることは依然として可能である。そしてこのことは、行為者は自分のしていることについて少なくとも「常に」

観察によらずに知るのだ、とは主張できないことを示しているように思われる。つまり、発話の時点において行為者が遂行していた作業が、必要な事態の成立をもたらさない場合、行為についての観察によらない知識は、観察による知識によって補われる必要があると考えられるのである。

一方で、二要素説も意図的行為に対する行為者の知識の一般的説明としては難点を抱えているのではないか。なぜなら、二要素説が正しいとすれば、行為者は自分の意図的行為について「常に」観察していることになるが、これは事実とは合わないように思われるからである。二要素説が観察の必要性を唱える主な根拠は、達成動詞によって記述されるような行為を「ちゃんと」やっているかどうかを知るためには、「何らかの事態」の成立を確認する必要があり、そのためには観察が必要だ、というものだろう。それでは、仕事動詞によって記述可能であるような行為、すなわちある作業を遂行することだけが必要で、その結果として何らかの事態が成立することを必要としないような行為の場合はどうだろうか。この場合、観察によって確認すべき、ある事態はそもそも存在しないのではないか⁵。とすれば、仕事動詞によって記述される行為をしているときには、行為者は自分が何をしているかを知るために、観察する必要はないのではないだろうか。

しかし、この点は二要素説にとって決定的な反論とはならないだろう。なぜなら、「何らかの事態の成立」の観察といったような意識的なプロセスだけでなく、行為の最中に行為者が得ている触覚や運動感覚などの各種感覚入力をも(無意識に行われる)観察と見なせば、依然として行為を適切に達成するためには観察が不可欠であるという二要素説の主張は維持可能なのである⁶。

また、二要素説に批判的なファルヴィー自身、自分が何をしているかを知るために、観察の必要な場面があることを認めている。行為者が達成動詞で記述されるような行為に従事している場合、たとえ行為者が結果的に首尾よく行為を達成したとしても、自分が何をしているかについて知るために、観察の必要な場合がある、とファルヴィーは言う。ここで、ファルヴィーが念頭に置いているのは、「行為の対象がこれまでにあつかったことのないものであるか、行為者の技能をさらに向上させようとしている場合」である(Falvey, p. 36)。つまり、行為者自身がその行為を出来ると確信できない場合には、観察の助けを

得る必要がある、とファルヴィーは結論しているのである。

こうした譲歩の結果、行為の達成が不確実な状況に話を限定すれば、ファルヴィーの立場は二要素説と同じものになってしまっているのではないだろうか。かくして、状況は二要素説の側に圧倒的に有利なように思われるのである。しかし、二要素説を支持する人々は、行為において「観察」の果たす役割を誤解しているのではないだろうか。次節ではその点について述べる。

5 実践的知識の性質

『インテンション』における、実践的知識の概念を理解しようとする際、キーワードになるのは、「行為の誤り」という語である。この語は次のような箇所に現れる。

ある場合には、事実の方が言わば言葉と一致しないが故に非難されるのであってその逆ではないのである。これは、…[中略]…たとえば自分が書いていると思っているのとは、違ったことを書いてしまうという場合にも生じる。テオフラストスが述べているようにこの場合の間違いは行為の間違いであって、判断の間違いではない。(Anscombe, §2, p.5)

自分が何をしているかを「知る」のに観察は必要か否か、という目下の問題に照らせば、このフレーズを前にして次のような疑問が浮かぶ。すなわち、たとえ自らの行為について知識を得るためには、行為の方が自らの行為についての判断に一致しなければならないとしても、行為を判断に一致させるためにはやはり観察が不可欠ではないのかという疑問である。

行為を判断に一致させるということで、どのようなことが意味されているのか、さらに確認しておこう。『インテンション』において、行為についての観察によらない知識(実践的知識)と対比されているのは、観察による知識(理論的知識)であった。アンスコムによれば、この二つの知識において、ある判断が知識とされるために(真とされるために)対象との不一致がどのようにして解消されるかは、全く逆になっている。つまり、理論的知識においては判断と対象が一致しないとき、判断の方が修正されるべきであるのに対し、実践的知識

において判断と対象が一致しないとき、修正されるべきなのは対象である行為の方なのである。以上に述べた、行為の修正を如実に示しているのは、行為のやり直しという場面においてだろう。この場合、実際になされた行為が、当の行為についての行為者の判断(「私は今～している」と一致しないがゆえに、行為がやり直される、つまり、行為の方が修正されるのである。たとえば、私が壁を黄色に塗っていると思っているにもかかわらず、実際に塗られた壁が赤いことが判明すれば、私は改めて壁を黄色に塗り直すだろう。もし壁を赤いままに放っておくとしても、それは私が判断の方を修正したことを意味しない。恐らくそうした場合、より適切な表現は「気が変わった(赤色の壁も悪くない)」というものである。そして、気が変わるのは少なくとも判断を端的に修正することとは異なっている。

つまり、理論的知識では対象の方が判断の真偽を決定する主導権を握っているのに対し、実践的知識では(奇妙なことではあるが)判断の方が判断そのものの真偽を決定する主導権を握っているのである。

6 「観察」の果たす役割

以上を踏まえるならば、「我々のしていることを知ることにに関して、観察の果たす役割は補助的なものにすぎない」というアンスコム的主張はどのように解釈できるだろうか。それは、次のようなものとなるように思われる。

行為者は、自分のしていることを観察することによって自分の行為についての知識を得ているのではない。そうではなく、行為者は自分の行為について、行為に先立って(それゆえ観察にも先立って)判断を下しているのである。もちろん、「いま～している」という行為者の判断が知識とされるためには、その判断通りの行為が実際になされなければならないだろう。しかし、ここでの観察の役割は、判断の形成に寄与すること(すなわち、二要素説が主張するように、自分が「ちゃんと」行為しているかどうかを確認すること)ではなく、むしろ、行為者が判断通りに行為することを可能にするというものであるように思われる。つまり、行為の対象や周囲の状況を観察することによって、自分の判断通りに行為を「ちゃんと」やるのが可能となり、結果として、行為が自

分の判断に一致することになるのである。こうした構造において、自分のしていることについての観察は、自分がしていることについての判断の形成には寄与しないものとして考えられている。アンスコムの主張における「補助的」という語はこうした意味で使われているのではないだろうか⁷。

二要素説が指摘するように、行為を「ちゃんと」やるためには、観察が必要であること、それゆえ、自分が「ちゃんと」やっているかどうかを知るためには、観察が必要であるということは否定しようのない事実である。ただ、それはアンスコムの用語法でいえば、観察による知識、すなわち理論的知識と呼ぶべきものだろう。こうした理論的知識が、観察によらない知識、すなわち実践的知識と区別されるのは、理論的知識は行為の修正に寄与するものの、実践的知識の出発点となる行為についての判断そのものの形成には寄与しないからであると思われる。

さらなる問題

本稿において私は、二要素説から提出された疑問に対してアンスコムの立場の擁護を試みた。二要素説の指摘するとおり、行為者は自分のしていることについて観察による知識を得ているのは確かである。しかし、アンスコムはそうした観察による知識(理論的知識)とは全く別なあり方をしているものとして観察によらない知識(実践的知識)を考えていた。実践的知識における行為についての判断は、観察の報告ではなく、それゆえ観察によって真とされるわけではない。行為についての判断が真とされるのは、判断通りの行為がなされることによってなのである。観察は判断通りの行為を行うことを可能にするが、判断を下すことには関わらない。その意味において、観察は「補助的な」役割を果たすにすぎないのである。

以上がアンスコムの立場であると思われる。しかし、こうした議論に実質を与えるには、さらに論ずべき課題が数多く残されている。そうした課題の中でも、以下の二つの点が重要であると思われる。

- 1) 自分が意図的にしていることについての判断が、観察に由来するものでないとするれば、それは一体何に由来するものなのか。

2) なぜ、意図だけでなく、意図的行為についても観察によらない知識を認める必要があるのか

1)についてはまだ私には答えることが出来ない。2)については以下に現在の私を持っている見通しを述べておくことにしたい。

なぜ、意図についてだけでなく、意図的行為についても観察によらない知識が必要なのだろうか？以上の議論において、実践的知識においては、行為者は自分の行為についての判断通りに行為することによって、当の判断を真にするのだと論じた。しかし、行為者は、意図的行為についての判断ではなく、意図についての判断を真にするべく、「ちゃんと」行為するのであり、意図的行為については観察による理論的知識を持つにすぎないと論じても、特に不都合はないのではないだろうか。そして、このように考えるならば、やはり二要素説の方が正しいように思われるのである。

しかし、私は行為者が自分の意図的行為について実践的知識を持つことにはやはり意味があるのではないかと考える。我々は、「手を振ろう」というような、端的に実行できるような意図を持つばかりでなく、「来年の夏は屋久島に行こう」というような、様々な手順(行為)を経て初めて実現可能な意図を持つこともある。そうした意図を実行に移す際には、我々のような有限な能力を持つに過ぎない行為者にも実行可能なかたちで、次にすべきことが示される必要がある。つまり、抽象的な目標でしかない意図を、行為という単位にまで具体化・細分化したものが、意図的行為についての実践的知識にあたるのではないだろうか⁸。こうした問題については稿を改めて論じることにしたい。

註

¹ ただし、行為者が観察によらずに知っているのは、ある記述のもとで捉えた限りで自分が何をしているかということである(Anscombe, § 6, pp. 11-12)。そして、この記述のもとでのみ、行為者のしていることは意図的行為であるとされる。なお、以下では特に断りのない限り、「自分のしていること」という表現は「自分が意図的にしていること」を意味するものとする。また、「行為」という語は「意図的行為」を意味するものとする。

- ² ファルヴィーによれば、近年二要素説を唱えている論者としては、Adams F., and Mele A., “The Role of Intention in intentional action”, *Canadian Journal of Philosophy* 19, 1989, p. 511-532がある。また、本文中で引用した野矢に先立って、門脇も以下の箇所において二要素説と同様の論点を提示している。門脇俊介『現代哲学』産業図書1996, p. 176
- ³ 行為者が横断歩道を渡りきらないのであれば、行為者は道路を「横断する」及び「横断した」と言うことは出来ない。それに対して、行為者が歩道を横断している(いまだ横断しきっていない)時点ではもちろん、「横断している」と言ってよい。また、行為者が歩道を横断しきらないとしても、後から「横断していた」と言うことは間違ではないように思われる。
- ⁴ 進行形と同様な性質を持つ表現として「～しようとする(try to～)」を挙げる事が出来るだろう。達成動詞であっても、「～しようとする」という表現とともに用いることによって、元々の達成動詞の意味に含まれている、ある事態が成立していない場合でも適用することが出来るようになる。ただし、「しようとする」という表現は、公共的に観察可能な意図的行為の背後に「～しようとする」という内的な行為の存在を想定させかねないという点で、進行形に比べて哲学的に「不健全」であると言える。
- ⁵ たとえば壁を黄色く塗るという行為の場合、実際に壁が黄色く塗られていることを観察によって確認しない限り、自分が壁を黄色く塗っているかどうかを知り得ないと言える。それに対して、黄色いペンキを探すとか、手を上下に動かすというような行為の場合には自分が何をしているかを知るために、確認すべき事態は存在しないように思われる。
- ⁶ Falvey, p. 30 ファルヴィーはこうしたことを論拠に、感覚を持つことは(したがって観察することは)意図的に行為するための必要条件であると述べている。ただし、ファルヴィーは自分がAしているを知るのに観察が必要であるとしても、「自分は、Aしている」という判断の正当化に観察が含まれるとは限らないと論じることによって二要素説を退けている。ファルヴィーの議論については、Falvey, pp. 33-37を参照のこと。
- ⁷ この段落に述べられている見方については、以下の文献から示唆を受けた。
篠原成彦「観察によらない知識について」 科学哲学会第35回大会 ワークショップ「外在主義と自己知」ハンドアウト
ただし、本稿は、こうした見方を篠原に帰すものではない。また、以下の議論における誤りがあるとすれば、それはすべて筆者の責任である。
- ⁸ ただし、このように論じるには意図の内容についてさらに論じる必要があるだろう。現在の私は意図の内容を「壁を黄色く塗ろう」というような一般的なものとして考えているが、行為者が意図的になすことは何であれあらかじめ意図の内容において規定されているという見方を取るならば、「実践的知識とは、行為者の意図内容を具体化・細分化したものである」という私の見通しは成り立たないことになるだろう。

文献

Anscombe G. E. M., *Intention*. 2nd ed. *Harvard University Press*, 2000.

Falvey K., "Knowledge in Intention". *Philosophical Studies* 99, 2000, pp. 21-44.

Ryle G., *The Concept of Mind*. University of Chicago Press, 1949.

野矢茂樹 『哲学・航海日誌』 春秋社 1999

(たけうち せいいち／関東学院大学)